

私が暮らしている愛知県豊橋市には、アサリの漁獲量が日本一の干潟があります。その干潟を六条干潟と言ひ、豊川の下流域に発達した砂礫干潟でその広さはおよそ360ha（東京ドーム8個分）あり、アサリの稚貝が毎年五千トン以上獲れ、その獲れ高は世界最高水準の発生域であり、そこで採れた稚貝を三河湾じゅうに撒くことによって、愛知県はアサリの漁獲量日本一を誇ります。

なぜ六条干潟はアサリが世界最高水準の発生域となりうるのでしょうか。それは愛知県の特徴的な地形によります。愛知県は渥美半島と知多半島が、まるでカニの両腕が三河湾を囲むように海に突き出しています。そのため三河湾内は波が比較的穏やかで遠浅になっており、魚貝類が生育するのに適した環境になっています。また外洋と接する部分、つまり内海への入口が狭く、奥に行くほど広がった地形を成し、外洋から湾内に入ってきた潮が両半島に沿って流れ、各半島の海岸の干潟や砂地で産卵されたアサリの卵がその潮流に乗って、ちょうどカニの両腕（両半島）の付け根にある豊川からの流れにぶつかるようにして卵が吹き溜まり、干潟にたくさんのアサリを宿すのです。

その海の恵みの宝庫と言える六条干潟にとって存続の危機とも言える出来事が平成24年末に起こりました。衆議院議員選挙で民主党から自民党へ政権交代した途端、一時沈静化していた設楽ダム建設の動きがまた活発化してきたからです。

東三河地方は、昔からしばしば干ばつに悩まされてきました。東三河の水がめと言われる宇連ダムの貯水率は例年梅雨明け時50%ほどにとどまり、夏季の終わりには恒例とも言える節水が待ち受けています。秋に襲来する台風にはその被害よりも恵の雨として台風のもたらす雨に胸をなで下ろすことが多いのです。それゆえ宇連ダムのみ水がめだけでは不安を感じるようになり、設楽ダム建設への期待を寄せるようになったのです。しかし平成22年、自民党から民主党に政権が交代したことで公共投資の見直しが決定し、建設工事が中断していました。しかし24年末の選挙で自民党が政権を取り戻したことにより、ダム建設が再び脚光を浴びる様になったのです。

なぜダム建設が干潟の危機と成り得るのでしょうか。それはダムを作り、水をせき止めることにより、上流から河口付近まで運ばれていた土砂の供給が断たれ、波による浸食や拡散により干潟が痩せ細り、いずれ消滅してしまう運命をたどると予想されるからです。また新しい土砂が流れてこないアサリの稚貝の定着に必要な砂のコーティングがなされないために発生量や海洋浮遊幼生物定着率に悪影響を及ぼすからなのです。

アサリの浄化能力はとても優れていて、たった一粒で一日に十リットル以上の水を浄化

することが出来ます。つまり六条干潟とその周辺に無数にいるアサリの浄化能力だけを考えてみても、20万人規模の下水処理場の浄化能力に匹敵します。そして六条干潟とその周辺のアサリの浄化能力と同等の規模の下水処理場を作るためには建設費だけで34億円以上かかるそうです。(維持費は含まない)

最近の地球温暖化や海洋の富栄養化により、三河湾には毎年のように赤潮や苦潮が発生し、漁業に多大な被害を与えるようになってきました。この原因は三河湾内の干潟を埋め立てて港を作ったことにも関係しています。昭和45年当時は3000haあった干潟が現在はおよそ10分の1ほどになり、それでもまだ埋め立て足りないのか六畳干潟をすべて埋め立てて港やモータープール、コンテナ置き場、港湾道路を作ろうとしています。六条干潟の存続に脅威を与えているのは設楽ダム建設だけではないのです。

愛知県は輸出産業の屋台骨である自動車産業の御膝元です。製造した車を船で輸出するためには大きな港が必要になります。そのため海岸が干潟や砂浜では車を運ぶための大きな船が接岸できないため都合が悪いのです。戦後高度経済成長に伴って干潟や砂浜は埋め立てられ、浚渫(しゅんせつ:海底の土砂を水深を深くするため掘削する事)されてコンクリートの港に変わりました。そのため自浄能力の低下した三河湾に赤潮や苦潮、貧酸素水塊が多発するようになったと考えられます。最近では慢性的な「日本一汚れた海」といわれるまでのレベルになってしまいました。

人間も手をこまねいて三河湾の汚染をだまっていたわけではありませんでした。遠浅の三河湾内に大きな船を通すには浚渫が必要になります。掘った砂を渥美半島の内海岸に運び人工干潟を作りました。総工費三億円の大プロジェクトでしたがその実は海底掘り下げ工事が出た不必要な砂の残土処理でした。その人工干潟には六条潟の稚貝を撒いて潮干狩りのできる海浜公園を作り一石二鳥を狙ったつもりでした。一年目は成功し潮干狩りの家族連れでにぎわったそうでしたが、その後人工干潟ではアサリの稚貝の生育に必要な栄養分やミネラル分の補給がなされないため繁殖せず干潟の砂が補給の無いまま波により流失したことも相まって今では訪れる人もなく期待外れの結果になってしまったそうです。

六条干潟にはアサリだけでなく、それを形作っている広い砂浜である吉前(よしざき)海岸も含めて海浜植物が多く繁茂しています。大潮の干潮時に姿を現すあまも等の藻場が群生しており、年間を通じて比較的穏やかで温かく、遠浅で豊川との水が混じるために、塩分濃度の変化を伴う汽水域で150種類以上の魚類の快適で安全な産卵場所兼生息地となっています。そのため「海のゆりかご」とか、「里海」などと呼ばれることもあります。

また六畳干潟は渡り鳥を含む水辺の鳥類の生息場所になっており、特に、渡り鳥の飛来地及び休憩所になっていて、それらが食する水生生物（カニ、エビ等）や貝類の宝庫となっています。春と秋にはシギやチドリなどのたくさんの渡り鳥が飛来し、冬にはカモやカモメの仲間がやってきます。その種類はおよそ 250 種にも及びます。このように普段から生息する鳥類のエサ場としてはもちろん渡り鳥の大事な中継地、渡りのエネルギー補給地として干潟は重要な役割をはたしています。この生物多様性の豊川の賜物である六条干潟をダム建設や埋め立てで、なくしてはならないと思います。

では今後六条干潟を守って行くにはどうしたらよいのでしょうか。私の思う行政の三河湾計画案は、縦割り行政のため、ムリ、ムダ、ムラが多すぎると思います。一斉に計画的に埋め立てや浚渫をしたつもりが経済環境の変化で港湾整備はスローダウンし、そのままの状態は何十年もほったらかしや、手つかずの状態になっている場所が多く見受けられます。行政が横のつながりをもっと持って、よくお互いの計画を理解し、徹底的に合理化し、精査してから必要最低限の埋め立てを行うことが自然を残す、つまり六条干潟を守って行くことになると思います。後先の事をよく考えず、埋め立て計画だけを最優先させることは何の利益も生まないことになるだけではないのでしょうか。

六条干潟でのアサリの飼育が可能になれば稚貝の売り上げで現在 3 億円ある収入に、成貝に育てることで 5 億円の売り上げがプラスされることになり、埋め立てた場合と埋め立てずにもらえる海の幸の価値と三河湾の水質の保全のどちらに利益があるのか天秤にかけてみることも重要だと思います。

また今現在の世界の自然への考え方の流れは、人間の便利さを最優先させたことによつて失われてしまったものを取り戻そうとする動きが主流となってきました。一度壊してしまったものを元通りに作り直す作業が行われるようになってきたのです。ですから埋めてしまった干潟をもう一度再生するという努力をしても良いのではないのでしょうか。一度埋めてしまった干潟を今更・・・などと考えない事です。ただし、人工干潟などを別の場所に作ろうなどと考えない方が良いと思います。先にも渥美半島に人工干潟を作った例をあげましたが、人工干潟が長期的に見てうまくいった前例はないからです。やはり、そこに自然にできた、存在したという理由と言うものがあるのです。一度自然を破壊したら、なかなか元通りには戻らないし、人工的に自然環境に近いものを作っても思った通りにはいかないものです。人間は環境を壊したり変えたりする前に今一度熟考し環境アセスメントをきちんと行い、精査してから行動に移すべきだと思います。

参考文献

六条潟を脅かす二つの開発計画 アジアの浅瀬と干潟を守る会 山本茂雄

www.city.toyohasi.lg.jp

六条潟を守ろう 六条潟と三河湾を守る会

干潟の自然 汐川干潟・六条潟・三河湾の干潟 豊橋市自然史博物館

三河湾の干潟・藻場 三河港湾事務所

www.mikawa.pa.cbr.mlit.go.jp

生態系保全マニュアル（六条潟・吉前海岸） 豊橋市役所環境保全課

www006.upp.so-net.ne.jp

愛知・六条潟 さわやか自然百景

（NHK番組 2015年3月15日放送分）